「酪農の未来を拓くお手伝い」

RDCD NEWSLETTER

～RESEARCH & DEVELOPMENT CENTER FOR DAIRY FARMING～

雪印メグミルク

2026 8

No 8

Report 01 経営分析勉強会（幌延地方酪農青年研究連盟主催）を開催しました！

2026年4月16日、幌延地方酪農青年研究連盟が主催する経営分析勉強会が雪印メグミルク幌延工場で開催され、当所から柳瀬リーダーが講師を務めた。この勉強会に先立ち、各酪農家（＝分析対象）の経営分析を行い、その内容をもとに勉強会にて講義を行った。

3年分の青色決算書を基に収益構造を「総点検」

経営分析勉強会では、分析対象の経営内容を単年度で判断するのではなく時系列的な変化を理解するとともに、同業他社比較として日本政策金融公庫が取り纏めた「農業経営動向分析結果」や留萌管内の牛群検定成績を用いることで、分析対象となった酪農家の経営の特徴を分析した。

分析対象は「同業他社」と異なる収益構造

分析対象・同業他社ともに直近の生乳売上や補給金の増加に伴い売上高は増加傾向にあることが示された。しかし、同業他社はその売上高の増加を収益に反映させているものの、分析対象は収益にあまり反映させることができていない状況であることを指摘した。

今ある「経営基盤の強み」をフルに活かす

このように同業他社とは異なる特徴を持つ分析対象だが、それでも経営基盤の強みを活かすことが経営改善につながることを語った。分析対象における経営の強みは、「自己資本比率の高さ（＝安定した経営基盤）」と、道北エリアならではの広大な「自給飼料基盤の有効利用」にある。そして経営改善は「経営を良くしよう！」というマインドセット（＝向上心を持つこと）も大切で、そのための事例紹介なども行った。

経営の「見える化」が次の改善につながる

経営改善のポイントは、以下の２点である。

①自分の経営を時系列にみる

②同業他社と比較する

この２点から自分自身の経営を見直し、改善すべき項目を洗い出すことから始まる。

最後に柳瀬リーダーは、「今回の経営分析は、過去の経営成績を評価するだけではなく、現状把握と次に打つ手の材料として使っていただくことで、経営の安定化に繋げてほしい」と呼びかけた。

今回の経営分析勉強会は自身の経営と現場作業の両面を見直す機会にしてもらえたら幸いである。

酪農家の皆さんと膝を付け合わせての経営相談

分析対象の概要
（２０２４年）

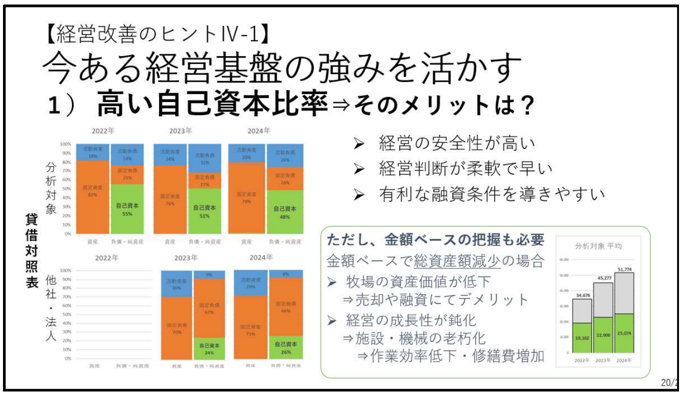
2024年		平均	最大値	最小値	留萌乳検
労働力（人）		2.2	3.0	1.0	−
圃場面積(ha)		62.3	83.6	40.0	−
飼養頭数	平均経産牛(頭)	43.6	58.2	32.0	69.7
	育成牛(頭)	19.0	33.0	10.0	−
	生産頭数(頭)	33.3	45.0	27.0	−
	販売頭数(頭)	27.8	46.0	19.0	−
	死廃頭数(頭)	6.0	9.0	4.0	−
	経産牛乳量(kg)	6,211	7,337	4,724	8,671
生乳出荷	乳量(t)	274.4	356.5	151.2	−
	FAT(%)	4.09	4.24	3.81	4.04
	SNF(%)	8.81	8.98	8.69	8.90
	SCC(千個/ml)	176.3	282.2	106.3	277.0

比較対象

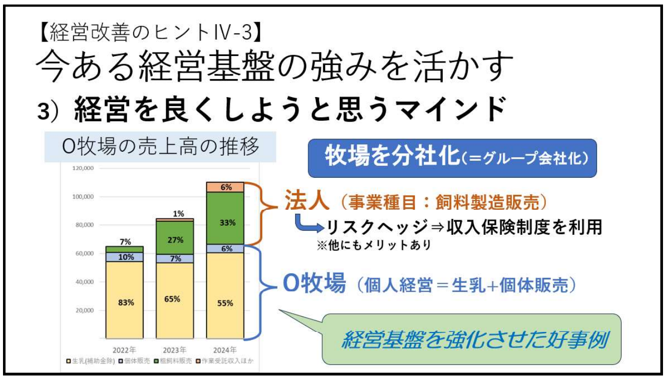
➢ 財務データ
「農業経営動向分析結果」（日本政策金融公庫）
酪農/北海道（2024年：個人91戸、法人302戸）

➢ 生産技術データ
「牛群検定成績表」（北海道酪農検定検査協会）
留萌管内検定成績表（2024年現在118戸）

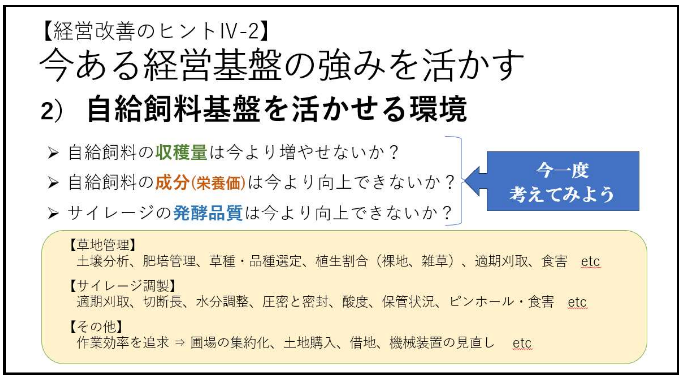
分析対象の概要および比較対象について



経営改善のヒント①（高い自己資本比率）



経営改善のヒント③（経営を良くしようと思うマインド）



経営改善のヒント②（自給飼料基盤を活かす）

［経　歴］
1976年 北海道札幌市出身
1999年 帯広畜産大学　畜産学部畜産管理学科（農業経済研究室）卒業
論文テーマ
「牛肉輸入自由化における海外産牛肉と牛肉等級別市場分析」
1999年 雪印乳業株式会社　入社
東京工場－東日本生産部－日野工場－本社酪農部
2003年　日本ミルクコミュニティ株式会社へ転籍
本社酪農部－東日本酪農事務所海老名駐在－西日本酪農事務所神戸駐在
－西日本酪農事務所
2009年　雪印メグミルク株式会社
西日本酪農事務所福岡駐在－北海道酪農事務所別海駐在－幌延駐在－なかしべつ駐在－西日本酪農事務所福岡駐在－本社酪農部
2025年12月　酪農総合研究所 酪農研究グループ（北海道支社）配属
［学位・資格］
学士（農学）／日商簿記2級
［これまでの活動実績（学会所属・専門分野・調査研究等）］
2021年第15回酪農研究会
「創業の精神を未来につなぐ～生産現場との大事なつながり～」
（雪印メグミルク・雪印種苗合同チーム　調査報告）
［関心領域］
酪農に関する経営分析
［津田研究所長からの人物紹介］
本間課長は、長年にわたり酪農部門の第一線で実務を積み重ね、酪農家と乳業との「つながり」を支えてきた中核人財である。全国各地での酪農業務を通じて、地域ごとの酪農現場と生乳需給調整を深く経験してきた。その豊富な実務経験は、酪総研にとって大きなポテンシャルを秘めている。生産者との信頼関係を丁寧に築き上げる実直な姿勢にも定評があり、現場と会社を着実につないできた職員だ。研究所と現場を結ぶ「車軸」として、これまで培ってきた知見を生かし、研究業務に邁進して頂きたい。

（研究所長：津田知亮）

酪農研究会で発表を行う様子

酪農研究会での一コマ

【RDCD NEWSLETTER】
所在地：〒065-0043　北海道札幌市東区苗穂町6-1-1
発行人：雪印メグミルク株式会社　酪農総合研究所　津田知亮
TEL：011-704-2131　FAX：011-704-2417　HPはこちらから！
酪農総合研究所
Research & Development Center For Dairy Farming

Topic01　酪農諮問委員会が開催されました！

4月24日に酪総研が事務局となり「酪農諮問委員会」が開催されました。酪農諮問委員会は、生産現場を代表する生産者や酪農乳業の有識者に参画いただき、代表取締役の諮問機関として当社グループの酪農に係る取組みや乳業への期待等幅広くご意見やご助言をいただいたり、わが国の酪農のあり方に関する意見交換を行っています。2010年より年2回の開催を実施しています。今回の諮問テーマは「国産チーズの維持・拡大をどのように進めていけばよいか」とし、６名の諮問委員の皆様からご意見を伺いました。不安定な国際情勢もあり酪農乳業界の持続性に強い危機感があることを共有し、国内乳製品 需要 1,200 万トン（生乳換算）をどう国産生乳で支えていくのかという大きな命題の中で、 国産ナチュラルチーズ増産に向けた議論が行われました。生産者委員からは「酪肉近で掲げた生乳生産量 780 万ｔ達成のためには国産チーズ増産 が必要不可欠だと理解している」「行政支援も含めて関係者で同じ方向を向くために生産者 も協力していきたい」との意見もありました。 研究機関関係委員の中からは、「関割制度による国産需要消失への対応は待ったなし」との指摘があり、具体的な国産チーズ増産へ向けた酪農支援策についての提言もありました。 最後は参加者で「危機感を持って国産チーズ増産に向け業界が一致した認識で声をあげていこう」と確認しました。

酪農諮問委員会の様子①

酪農諮問委員会の様子②

酪総研コラム　ゲームチェンジャー

最近、牧草地（以下、圃場）を歩いていて、ふと思うことがある。我々は普段、牧草の植生調査などで広大な圃場を歩いているのだが「これ、一応見ているつもりだけど、本当に植生や圃場全体をしっかり見れているのか」と不安になることもある。それぞれの牧草の割合や草丈、密度等々。ベテラン社員のように経験を積めば、ある程度の状態は分かるようにはなる。それでも実際には、「ここが違った！」という感じる場面は少なくはない。

近年、ドローンの発達が目覚しい。酪農分野においても圃場データ管理や可変施肥、中には有害鳥獣を寄せ付けない為に使用することもあるそうだ。ドローンで撮影したデータは、人間の目で見た時には分からなかったことがはっきりと見えることがある。一見、生育がそろっていたと思われる圃場にはっきりしたムラがある。線のように続く生育差や、部分的な遅れ。地上では断片的だった情報が、全体の構造として見えてくる。

圃場のデータ管理については、「現場で見て、判断して、データ集計をする」という流れがこれまでのベーシックな手法である。これは言い換えれば現場の経験値と年数がデータの精密度にも強く結びついているということでもある。

しかし、ドローンによって可視化が進むと、この流れが少しずつ変わることがある。圃場を歩いていたときには気づかなかった差が、すっと見えてくる感覚がある。もちろん、だからといってドローンが特別すごい技術だ！という話ではない。ただ、「見え方が変わる」というのは、思っている以上に大きい変化である。これまでは、自分の経験や感覚で判断していたものが、画像として第三者に正確かつ客観的に共有できるようになる。

すると、「なんとなくこう思う」ではなく、「ここがこうなっている」という話ができるようになる。この違いは、地味だが徐々に効いてくる。例えば、作業を誰かに任せるとき。これまでは説明が難しかったことも、画像があれば伝えやすい。そうなると、「全部自分で見ないといけない」という状況から、少しずつ抜け出せる可能性が出てくる。

人手不足が課題だと言われて久しい酪農業界だが、「誰でも圃場管理を任せられる形にする（＝仕組み作り）」ことも同じくらい重要なのかもしれない。ドローンは、そのきっかけの一つになり得る気がしている。「ゲームチェンジャー」というと、何か劇的な変化を想像しがちだが、実際にはこういう小さなズレの積み重ねなのかもしれない。

つまり、これまでとは見え方が少し変わる。それによって、判断が少し変わる。結果として、やり方が少しずつ変わっていく。その延長線上に、あとから振り返って「あれが転換点だった」と言える瞬間があるのだと思う。これを例えるなら「塞翁が馬」である。一見すると良い変化も、別の課題を生むことがある。逆に、手間や負担に見えるものが、結果的に全体の改善につながることもある。ドローンによる変化もまた、単純な良い・悪いでは測れないということだ。そして、それでも、見え方が変わった以上、元のやり方には戻れない。そして、その変化にどう向き合うかが、これからの酪農研究に問われている。

（コラム執筆：研究員 大山冬馬）